

一般毒性の重大性に関する不確実係数の付与による有害性クラスの見直し

資料2-6-②

CAS	旧二監 番号	物質名	値 単位	有害性評価値 (重大性UF含まず)	有害性 クラス (一般)	暴露 クラス	毒性所見等	重大 性UF 案	備考	重大性考慮後	
										有害性 クラス (一般)	優先 度
25167-42-4	207	2, 3-エポキシプロピル=メタクリレート・スチレン共重合体	1000 mg/kg/day	1.7	外	4	雌雄ともいずれの群でも被験物質投与に起因すると考えられる変化は認められなかったため。尿検査において1000mg/kg群の雄にビリルビンの増加が認められた。尿ビリルビンは主に肝障害の指標となるが、血液生化学的検査および病理学的検査において肝障害を示唆する変化は認められず、また陽性の程度も軽度であったことから生理的変動範囲内の偶発的变化と判断した。	1		外	中 (変異原クラス3)
6425-39-4	255	ビス(2-モルホリノエチル)=エーテル	8 mg/kg/day	0.013	3	4	用量依存性を有する変化として、一般状態で流涎が雌雄40mg/kg群までみられたことによる。 (投与群(mg/kg/day)0, 8, 40, 150, 600 回復群(mg/kg/day)0, 150)	10		2	中
	333	N, N'-(m-フェニレンジメチレン)ジシトラコニミドを主成分とするN, N'-(m-フェニレンジメチレン)ジシトラコニミドとN-[3-(メチリデンスクシニミドメチル)ベンジル]シトラコニミドの混合物	10 mg/kg/day	0.017	3	4	中用量群(50mg/kg)の雌雄に生化学的検査、尿検査および組織学的所見等に被験物質による毒性の影響はみられなかったが、一般的症状として流涎、立毛等の徴候が観察された。 (流涎は被験物質の刺激性に起因するものであり、神経性症状ではないと判断。))	1		3	中
111-40-0	382	N-(2-アミノエチル)-1, 2-エタンジアミン(別名ジエチレントリアミン)	1000 ppm	0.35	4	4	7500 ppm(530mg/kg/day)以上: 体重増加抑制(雌雄)、MCV及びMCHの増加(雄)、白血球数及びリンパ球数の増加(雄)、MCV及びMCHの増加(雄)、白血球数及びリンパ球数の増加(雄)、血糖値の減少(雄)、尿pHの上昇(雄) 肝臓・腎臓・脳の相対重量増加(雌)、 15000 ppm(1060mg/kg/day): 摂餌量減少(雌雄)、腎臓・精巢、脳の相対重量増加(雄)、副腎・心臓の相対重量増加(雌)	1		4	低
180128-56-7	513	クロロメチル(オクチル)ジスルファン	50 mg/kg/day	0.083	4	3	(変化物1)250mg/kg/日投与で、血漿アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ活性の上昇および限局性心筋炎の発生率および重症度の増加が認められた。これらの変化は1000mg/kg/日投与ではアラニンアミノトランスフェラーゼ活性の上昇とともに認められた。そのような変化は50mg/kg/日投与の雌雄の動物では認められなかった。	1	変化物データにて評価。NOELは変化物1由来	4	中
2403-88-5	913	2, 2, 6, 6-テトラメチルピペリジン-4-オール	60 mg/kg未満/day	0.01	3	4	被験物質投与に起因すると考えられる死亡が、雌の60 mg/kg群および雌雄の600 mg/kg群で観察された。一般状態の観察で被験物質投与後に眼瞼下垂および散瞳が雌雄の60 mg/kg以上の投与群で、自発運動低下が雌雄の600 mg/kg群で認められた。また、雌雄の200 mg/kg以上の投与群で体重増加抑制が認められ、摂餌量の高値が雌雄の600 mg/kg群で認められた。雄の血液学検査、血液凝固能検査および血液生化学検査には被験物質投与の明らかな影響は認められなかった。器官重量では雌雄の600 mg/kg群で副腎重量が高値を示し、雌の600 mg/kg群で肝臓重量が高値を示した。	10	既存点検DBにデータ有り。 http://dra4.nihs.go.jp/mhiw_data/home/paper/paper2403-88-5d.html	2	中